国際シンポジウム“Re-Contextualizing Self/Other Issues: Toward a Humanics in Africa” 参加報告書

平成 12 年度入学
派遣先学会：国際シンポジウム“Re-Contextualizing Self/Other Issues”
佐川　徹

１．学会について・学会に関するコメント

派遣者が参加したシンポジウムは，2007 年 10 月 2 日と 3 日の 2 日間にわたってウガンダ共和国の首都カンパラに位置するマケレレ大学で開催された国際シンポジウムである。マケレレ大学社会学部，京都大学アフリカ地域研究資料センター，日本学術振興会が共催し，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が協賛した。

シンポジウムの目的は日本とウガンダの学的交流を促進することと，アフリカにおける人類学的研究の今日的意義をアフリカで議論することであり，5 カ国から 20 名（日本 9 名，ウガンダ 8 名，ケニア 1 名，英国 1 名，米国 1 名）のアフリカニストが参加した。それぞれ人類学の理論的側面，創造的側面，応用的側面を取り扱った 3 つのセッションと，アフリカを代表する知識人であるデューク大学のムディンベ教授による特別講演，そして総合討論によって構成されていた。会場には 2 日あわせて 300 名近くの来聴者が訪れ，活発な議論が展開されていた。

２．派遣者の発表と質疑の内容

発表タイトル：Indigenous practices for peace among ‘violent’ pastoralists in East Africa.
発表者名：Toru Sagawa

エチオピア・ケニア・スーダンの三国国境付近は一世紀以上にわたって断続的に牧畜民間の紛争が発生してきた。この地域の先行研究において，民族間紛争に焦点を当てた研究はこれまでさかんにおこなわれてきた。その一方で，現地の人びとがおこなっている平和形成に向けた諸実践や在来の平和概念に焦点をあてた研究はまれであった。

現在では人類学者がおもな研究対象としている「ローカル」な紛争発生地域であっても，しばしば外部アクターによる紛争緩和や平和構築を目的とした介入がおこなわれている。しかし，在来の戦争や平和の論理を十分に考慮しないままになされる介入は，地域に無用な混乱を招くだけである。外部アクターによる介入をより批判的に検討していくためにも，これからはローカルな社会が有する「平和に向けたポテンシャル」をより積極的に探求していく必要がある。

発表では，三国国境付近に暮らすダサネッチが近隣民族とのあいだに有している友好的な社会関係の諸相(交易，共住，友人，親族)を明らかにしたうえで，そのような関係が民族間の戦争や平和とどのように関係しているのかを検討し，民族境界を越えた横断的紐帯が有する「平和に向けたポテンシャル」を探求した。

質疑応答の時間には，近隣民族との戦争において宗教的要素がいかなる役割を果たすのか，また牧畜民と農耕民では戦争への取り組みにちがいがあるのか，といった質問がだされた。

３．学会参加により得られた新たな知見

発表終了後には，ほかの発表者やマケレレ大学の学生たちと議論を交わし，相互の研究に対する理解を深めるとともに，新たな問題への学的関心を相互に刺激しあった。シンポジウムのおもな参加者や来聴者は人類学者や地域研究者であったが，芸術や文学，哲学を専攻する研究者も参加，発表していた。かれら／かの女らは，みずからの専門分野に閉じこもるのではなく，人類学的なフィールドワークの手法などを積極的に研究方法に取りいれた学際的な研究をおこなっており,刺激的な発表が多かった。それらの発表をとおして，他分野の知見に広く目を配りながら研究を進めていくことの重要性を再認識させられた。

４．その他学会の発表テーマを俯瞰的にみた感想・近年の動向について

シンポジウム開催の目的のひとつは，日本とウガンダの学的交流を促進することであったが，ウガンダ国内の事象を扱った日本人研究者の発表では，来聴者をまじえた活発な議論がなされており，目的をある程度達成していたのではないかと感じた。

また発表者の多くが，詳細なフィールドデータに基づいて，各分野における従来の一面的なアフリカ理解に再考を促すことを目的としており，地に足のついた研究への志向性を感じた。来聴者のひとりは，従来ウガンダで開催されてきたシンポジウムの多くは，アフリカの問題や危機を扱ったものであるのに対して，このシンポジウムはアフリカのポジティヴな側面を扱っており新鮮であった，というコメントをしていた。このコメントは，日本人によるアフリカ研究が有する特徴のひとつを的確に指摘したものであり，本シンポジウムは欧米の研究に比べて知名度の低い日本人の研究をアフリカの人びとに伝える重要な機会になったと考えられる。

５．今後の研究に今回の学会参加がどのような影響を与えたか？

シンポジウムのようすは，翌日の地元誌に掲載されていた。わたしの発表した内容の一部も新聞に掲載されていたが，それはわたしが意図した内容とはおおきく異なった観点からの取り上げられかたであった。牧畜民の紛争は多くのアフリカ諸国で重要な政治問題となっており，一般的にもつよい関心を呼ぶテーマになっている。もちろん，これまで自己の研究が有する政治的含意には注意していたつもりだが，発表に用いるデータの選定やスライドの作成においては，今後ますますの注意を払っていく必要性をつよく感じた。またみずからの研究が，政治問題化している牧畜民の紛争にたいしていかなる提言をおこなっていくことができるのかを，より明確に意識しながら調査研究をおこなっていくことの必要性を感じた。

シンポジウムのようす（白石壮一郎氏撮影）